

保守主義の哲学

---桜宮高校事件に観る、橋下徹の「白紙(リセット)思想」の危険な本質についての考察---

まず、【産経新聞記事】からの抜粋。

【市教委、入試可否21日に判断 “妥協案”も浮上 橋下市長は在校生に直接説明へ】(産経新聞 2013.1.20 22:12)

大阪市立桜宮高の男子生徒＝当時(17)＝の自殺問題に絡み、橋下徹市長が要請した同校体育系2科の入試中止の可否について、市教委は21日午後の教育委員会議で判断する。

中止の代わりに普通科の定員を増やす妥協案と、予定通り実施する案が諮られる見通し。橋下市長は21日午前、同校で在校生に直接自身の考えを説明する方針。

橋下市長は15日、

「伝統をすべて断ち切らないと新入生は迎えられない」

と述べ、生徒が所属していた同校体育科(定員80人)とスポーツ健康科学科(同40人)の2月の入試を中止するよう市教委に要請。市教委は21日に判断することとし、高校入試を合同実施している大阪府教委などと協議を重ねてきた。

府教委は松井一郎知事の要請を受け、体育科を置く府立2校の定員増を検討したが、教員確保が間に合わないとして断念。桜宮高の普通科定員(160人)を、体育系2科の定員計120人分増やす方向で調整してきた。

市教委は、

(1)後期日程(3月11日)にずらして普通科と同じ国、数、英、社、理の5科目(各70点)で実施

(2) 現行の前期日程(2月20、21日)のまま実技試験(150点)をのぞいた国、数、英(各50点)の3科目に小論文(30点)を加える一の2案を検討。

(1)は、受験生の負担が大きいため除外し、より負担感の少ない(2)を今月21日の教育委員会議に諮る方向で調整している。

ただ、市教委内には入試中止への反対意見も根強く、21日の会議には、体育系2科の入試を現行のまま実施する案も諮る予定。

一方、橋下市長は20日、市教委側から「在校生が混乱しているので考え方を説明してほしい」との要請を受け、21日に同校で在校生に入試中止などの考え方を説明することを決めた。

何と身勝手な行政側の一方的議論であろうか。

■ 第一点目。

大阪市立桜宮高等学校の受験生は、受験生(及びその保護者や家族)の自由意志の選択によって受験校を決定するのである。

桜宮高校と大阪市教育委員会(況や大阪市長)が決定するものではない。

つまり、受験生(及びその保護者や家族)は、今回の桜宮高校の事件も十分考慮した上で、桜宮高校を受験する・しないの判断をするのだから、

(ただし、事件の発生で同校を受験する気が無くなった受験生に対しては、可能な限り受験願書の出し直し等を許可するなどの自由を与える配慮があつて然るべき)

学校・市教委側が自ら進んで体育科などの門戸を閉ざす必要など皆無。

橋下徹が言う、

「学校側が新入生・在校生の教育に責任を持てる体制になっていない(=学校・市教委側の新しい運営方針が決まっていない)から、入試を実施して新入生を受け

入れる(=門戸を開いておく)ことは、行政として無責任な行為だ！」

などという詭弁は、全くのデタラメであり、「無責任」の極致。

なぜなら、大阪市長(=行政の長)と大阪市教委・市立高校などの教育行政側が、「新入生の受け入れ」と「在校生の今後の教育」に対して(行政・教育機関として)「責任を持ってない・果たせない」という理由で、教育行政の職責(職務)を一方的に放棄する(=入試中止・入学拒否する)などと大阪市民に宣言することほどに愚かな責任放棄(=行政機関・学校の存在意義の否定)はあり得ないからである。

■ 第二点目。

橋下徹の言う、桜宮高校の「伝統」とは一体何なのか。

また、「伝統をすべて断ち切らないと、新入生は迎えられない」という意味は一体何なのか。

果たして、桜宮高校の「伝統」すべてが、同校の歴史的連続の中の「一部分」として露見した「悪習・因習」の中に包括され得るというのか。

そもそも、「伝統」とは「古き、良き法が、法である」のと同様に、「古く」かつ「良い」という二つの属性を備えているものを言うのである。

このことは自明であって、例えば「我が国の伝統は」・「我が校の伝統は」・「我が社の伝統は」・「我が家の伝統は」と我々が言う時には、必ずそこに「古いこと」かつ「良い(善い)こと」という「二つの属性」が含意されているのは容易に理解できるであろう。

橋下徹は、これまで常に、「伝統」とは古臭い(=時代に合わない・時代遅れ)のものにすぎないという理由で嫌悪し、「伝統」など破壊して白紙にし(=リセットし)、新奇で合理的であると感じられる「何か(新しい制度)」を創造することこそが、物事の本質的・根本的解決策だと発言してきたが、今回もこの「白紙(リセット)」思想の延長上にあるのは明白である。

しかしながら、ある組織(集団)の「伝統」の否定や破壊とは、

- ・ その組織(集団)の「古き」属性(=過去からの時間的・空間的連続性)

- ・ 「良き」属性(=真善美とそこに起源する徳目)

の両者共に否定し破壊することを意味することになるから、それは結局、その「組織(集団)の存在価値そのもの」を過去に遡って全否定することを意味している。

つまり、「その組織(集団)の中で過去に生きた者すべて」の否定である。

ここで、橋下徹の発言「伝統をすべて断ち切らないと、新入生は迎えられない」に話を戻せば、そこに含意されている本質はもはや明瞭であろう。

桜宮高校の事件(=教師の体罰に起因する生徒の死および学校側の教育・指導方針の過誤・不備など)に内在する悪徳は許されざるものであるのは自明のこと。

しかし、橋下徹はこの事件の中に内在する悪徳の本質について詳細な議論も検討も行わないうちに、その「悪徳」を「桜宮高校の伝統」全体に蔽いかぶせ、「学校の(伝統)すべて」が悪徳であると、詭弁的に論理をすり替えている。

これが、「伝統をすべて断ち切らないと、新入生は迎えられない」という違和感ある発言の真意である。

だから、橋下徹はその「伝統(=過去のすべて)」への破壊衝動から、

「(無関係の教員も含めて)教員総入れ替えをせよ！」

とか

「(高校とは全く無関係である受験生の)唐突な入試の中止！」

等々、事件の解決と学校教育の改善の本質から大きく外れた、「学校そのもの(全体)」の「白紙・リセット」する政策を、予算編成権の行使をちらつかせて、半ば恫喝的に用いて、桜宮高校や市教委に強制しようと躍起となっているのである。

橋下徹の発言には、桜宮高校の卒業生(OB)・在校生・(同校への)受験生(及び保護者など)、そして事件で亡くなった生徒の悲痛な苦悩に対する心からの同情心・優しさ・愛情・思いやりの感情が微塵も感じられない。

橋下徹の人間性(本性)とは極めて冷徹であり、残忍であり危険である。

■ 三点目。

大阪府知事(府教委)・大阪市教委の入試代替案も大阪市民(=受験生、保護者・家族など)を完全に無視した「行政(教育)側の身勝手な辻褃合わせ」に終始しているにすぎない。

受験生はすべて完全に「蚊帳の外」に置かれている。

受験生(及びその保護者や家族)は自己の自由意志で受験校(=桜宮高校)を選択するのだから、桜宮高校体育科などの入試を中止し、同科を受験できない受験生を別の府立高校などへ「数合わせ的」に振り替えたところで、同校を受験しようとする受験生にとって一体何の意味があるだろうか？

大阪市・大阪府は、受験生の希望校を己の御都合主義で突然変更することを、あたかも JR が事故でストップした場合などに、近隣の私鉄に乗客を振り返る代替輸送と同次元に考えているかのようだ。

大阪市教委の代替案(1)、(2)も橋下大阪市長に予算恫喝されて急遽検討した苦肉の策であろうが、受験生(及び保護者・家族)にとっては迷惑千万な話であろう。

そもそも、一般論として、受験生は希望校への受験と合格に備えて、過去に市教委と学校が入学要領などで提示している受験(選択)科目の種類や実技の有無、あるいは内申書からの加算点などを考慮して、長期間の受験勉強の努力と準備をして調整してきているのである。

それらの努力を無視して、入試の直前に平然と入試条件(=既定の競争ルール)を変更できるなどと考えること自体、言語道断であり、市長(市教委)の明白な失政であって、受験生(及び保護者・家族)からすれば噴飯ものである。

大阪市教委と桜宮高校教員が為すべきことは、行政(教育)側の御都合主義で入試を中止したり、入試科目・内容を変更したりすることではない。

為すべきことは、例えば

- ・ 大阪市行政(教育)が為すべきことは、事件で混乱に陥っている桜宮高校を

受験しようとしている受験生らが落ち着いて受験できるような環境を整えるために最大限の努力をすること。

- また、桜宮高校校長以下すべての教員は、在校生の精神的ショックを可能な限り早急に緩和する方策を考え、学校運営を正常化する努力を全力で為すこと。
- そして並行して、同校及び市教委等は、今回の事件の悲惨を決して再発させないようにすべく、教育改善方策を真摯に議論して、至急に取りまとめて、学校運営・生徒指導に反映させていくこと。

などであろう。

さて最後に、橋下徹の「白紙(リセット)」思想の本質を観取するために参考となる哲学的知見を掲げておきたい。

ベルジャーエフ曰く、

「進歩(主義)の理論でつきあたる…根本的矛盾は、時間の問題——過去・現在・未来——に対するこの理論の誤った関係にある。進歩の理論は過去と現在を犠牲にして未来を神化するのであり、科学的見地からも哲学的ないし道徳の見地からもこれを正当化することはできない。

進歩の理論は一個の宗教的帰依、一個の信仰を示す(にすぎない)。

…進歩の理論は《見えざる(未来の)ものについての告知》であり、来たらんとするものの告知であり、《その信仰をいただくものへの福音(にすぎない)》のである。」(『ベルジャーエフ著作集1』、白水社、229～230 頁、()内:私(=ブログ作成者)の補足。)

「進歩(主義)の理論は、人間の世界歴史の諸課題が未来において解決されるであろうということ、人類の歴史において、人類の運命において、高次の完全な状態が達成されるような瞬間が到来するであろうということ、そしてこの高次の完全な状態において、人類の歴史の運命をみたしているあらゆる(過去の)矛盾が解消され、(過去の)あらゆる問題が解決されるであろうことを前提とする。

これは、コントとヘーゲルとスペンサーとマルクスの信仰であった。

このような仮定は正しいのであろうか？

かかるものを信ずべきいかなる根拠をわれわれは持っているであろうか？

…根拠たりうるべきものはおよそないのである」(『ベルジャーエフ著作集1』、白水社、230 頁、()内:私(=ブログ作成者)の補足。)

「実証的意味における進歩(主義)の本質は、人間的歴史の運命が生起し、世代が相次いで交替する時間の流れの中で、人類がなんらかの、私のあずかり知ることのない山頂に向かって登って行くということであり、しかもその目指す目標である高次の状態に比較すれば、それに先行するあらゆる世代は単に連鎖の一環であり、手段であり、道具であるにすぎず、自己目的ではないのである。

進歩(主義)はあらゆる人間世代、あらゆる人間的人格、あらゆる歴史的時期を、終極の目標に対する一個の手段、一個の道具に変えてしまう。

…この(進歩)理論は膨大な群衆、人間的世代の果てしない連続、時代と時期の広大無辺な系列に対して、たんに死と墓窖を与えることを、意識的に、また本質的に、主張するものである。」(『ベルジャーエフ著作集1』、白水社、231頁、()内:私 (=ブログ作成者)の補足。)

「進歩の宗教は、いっさいの人間的世代、いっさいの人間的時期を、それ自身無価値、無目的、無意味なものとして、ただ未来の手段であり道具であるものとして見る。

ここに進歩の理論の宗教的・道徳的な根本的矛盾が存在し、それがこの理論をわれわれに受け入れがたく、承認しがたいものとする。

進歩の宗教(信仰)は死の宗教(信仰)であって、(キリスト教の、生きとし生けるものすべての)復活の宗教(信仰)ではない」(『ベルジャーエフ著作集1』、白水社、232頁、()内:私 (=ブログ作成者)の補足。)

橋下徹の「白紙(リセット)」主義の哲学的本質は「進歩の宗教」に根ざしている。

蛇足だが、マルクス主義が「無神論的邪教 (= 宗教)」となり、マルクス主義者の「狂信的布教 (= 運動)」の原動力の本源は、この進歩主義的「救済教義」 (= 妄想) の中にあるのである。

このように、橋下徹は明白な「極左」主義者である。

ところが世間では、「日本維新の会」の掲げる

- ・「TPP 賛成」
- ・「国旗・国歌法賛成(条例制定)」
- ・「憲法改正賛成」

などの政策の表層を觀て、政策の深層にある哲学的本質を觀ず、橋下徹を

- ・「保守派である」とか、
- ・「自由主義者である」とか、
- ・「共産主義と対立する主張をするから極左(左翼)ではない」

とかいう感覚的・直感的な評価を行い、橋下徹が
「変革者(改革者)であるが故に、有望・有能な政治家である」
などと、真逆の誤評価をする傾向が強い。
この際、そのような評価は「甚だしい見当違い」であることを指摘しておく。

政治家・橋下徹こそ、「大阪の大恥」・「近畿、関西の大恥」。
これが唯一正しい「真実」である。

平成 25 年 1 月 21 日
兵庫県神戸市にて記す
By エドマンド・バークを信奉する保守主義者